

「氣爾余波受吉奴」存疑

原 田 芳 起

一 本 文

不尽能爾乃 伊夜等保奈我伎 夜麻治乎毛 伊母我理登倍婆

氣爾餘婆受吉奴

(万葉集卷十四・三三五六)

結句「氣爾余婆受」の「婆」は『類聚古集』『神田本』その他に「波」とあるから、「氣爾余波受」である可能性もあるわけである。「けによばず」と「けによはず」と、いずれが妥当な訓みであるかは、伝本の上からだけでは定めがたい。

万葉仮名の「婆」が濁音、「波」が清音として使い分けられている事は疑う余地がない。この事は卷十四においても明確に使い分けられていたものと見るべきである。「氣爾余婆受」が原初の形であったとすれば「氣爾余波受」とある写本は誤写である事になるが、あるいはその逆であったかも知れない。そのどちらを正しいと認めるかによって、解釈が全く違って来る。現在時点でも、「日に及ばず来ぬ」とする説と「氣呻はず来ぬ」とする説と、おおよそ二つに分かれている。

本文を考える上で甚だ困惑を感じさせるのは、卷十四の諸本の用字面の異同を検討してみると、この「婆」と「波」とを混同して書写した傾向がかなり著しいという点である。

たとえば、三三五五の『寛永板本』、

安麻乃波良 不自能之婆夜麻 己能久礼能 等伎由都利奈波

安波受可母安良牟

の、第四句の「波」は活用する語の未然形に接続する助詞であるから「ば」でなければなるまい。かりにも清音であったとは考えにくい。『校本万葉集』によると、『温故堂本』には「婆」とあるから、これに従って訂正する事が出来るが、『温故堂本』がいつも正しいと限らず、逆に板本が正しく「婆」とある所を「類西温矢京」の諸本誤って「波」とする三三五二の例もある。

奈久許恵伎氣婆 類西温矢京「波」

また、三三九四のように、板本が誤って「波」としたのを他の多くの本によって「婆」に訂正出来るという例もある。

和須良延波古曾 元類西神矢京「婆」

中には「校本万葉集」に取り上げられたすべての本が「婆」でありたい所に「波」としている例もある。

古非思家波 曾氏毛布良牟乎(三三七六)

伊可尔思氏 古非波可伊毛尔(同、或本)

伊禰都気波 可加流安可手乎(三四五九)

比流等家波 等家奈敞比毛乃(三四八三)

許乃母等夜麻乃 麻之波尔毛(三四八八)

これらは校異の記載のないものである。あるいは巻十四では原本から清音仮名の「波」を濁音の「婆」に通用する傾向が多少とも存在したのかも知れないという疑いも、むげに否定しがたいが、他本で修正出来る例もさらに多い点から考えると、清濁を区別しなくなった平安期の書写から「波」「婆」の混同がいろいろの写本に生じ、それが仙覚以後の校本に跡をとどめたのであると考えた方が、より安全であろう。

板本では「婆」から「波」への移動と思われる例が殆んどであるが、他の写本ではこの逆の移りがおとらず多いので、混同として捉えた方がよさそうである。

右のような伝写の実態から考えて、当面の「氣尔余婆受」「氣尔余波受」の両者のどちらが正しいかは、写本の比較だけでは判断しがたいようである。

むしろ訓話の方面から、「日に及ばず」と「氣呻はず」とを比較して、妥当性の有無を吟味する事を、本文を決定する判断の前提とすべきである。

二 訓話諸説(近世)

契沖の説は「代匠説」に見える。初稿本と精撰本では小異が見られる。

〔初稿本〕けによはずきぬは、けは霧なるべし。第七に此小川チリノスエ白氣結とよめるやうを思ふべし。よはずはまよはずなり。遠く長き山路なれども、妹がりといへば霧にもまよはずしてきぬるとなり。次下の歌、霞居るといひたれば、此氣といへるも霞にや。雲霞霧煙みな気なれば、いづれにもわたるべし。又けは異にて、よはずは不及にや。異は異義異見などいふ異にて、遠く長き山路なれば、大かたの事にはいかゞとためらひて異義にもよぶきを、妹が許へとおもひたちてくれればことなる思案をめぐらすにをよばずしてきぬるとなり。(下略)

さまざまに可能性を模索しているが、「よはず」は「迷はず」だというのは乱暴な考えかたで、中世の略語論から脱していない。精撰本ではこの考えは捨てている。別案として提出した説も、「異に及ばず」として「異なる思案をめぐらすに及ばず」の意だと説くのは、あまりにうがちすぎて説得性がない。特に「け」に「異なる思案」と意味を与えようとするのは、言語的に条理を無視している。この考えも精撰本の方では彼みずから捨てている。

〔精撰本〕落句ノ氣ハ異ト食トノ両義有ベシ。余婆受吉奴は不^レ及来ヌナリ。氣ハ異ナラバ、カハレル思案ニ及ブマデモナクテ

来ヌトナリ。食ノ義ナラバ、莽蒼ヲ行モノハ兼テ糧ヲ蓄習ヒナ
ルヲ、ソレマデモナクテ来ヌトナリ。又第七ニ白氣ヲキリトヨ
ミタレバ、余婆受ハ不_レ迷ニテ、霧ノ深キニモ迷ハズシテ来ヌ
トヨメル歟トモ云ベケレト、妹許ト思ヒ立ツトモ、霧ニハ迷フ
マジキニアラネバ、サキノ二ツノ中ニテ、猶、食ニモ及バズト
云ナルベシ。

契沖の説の落着する所は「食にも及ばず」というのであるが、「
食を準備するまでもなく」をその句から引き出そうというのでは、
あまりにも言語の意味をもてあそびすぎている。私には納得しかね
るが、この契沖説は、すこしく修正を加えた形で宣長に継承されて
いる点、注釈史的意義を認める事が出来る。

宣長の説は、千蔭の『略解』に引いた所によって知られる。ただ
し、千蔭は、自説としては「氣不_レ呻吟」を取っていて、異説とし
て宣長の見解をあげているのである。

宣長云、けはけ長きのけにて、来経也。さればこは時刻を移さ
ずいそぎて来ぬと云也。よばずは不_レ及也といへり。猶考べし。
千蔭の自説は、真淵の『万葉考』の考えを継承したものと見られ
る。真淵説は簡略であるが、契沖・宣長と伝流した「けに及ばず」
説と対立するものとして注意を要する。

〔万葉考〕氣は息也。尔余婆受は不_レ呻吟也。山路につかれて
は息つきうめく物なるを、妹がもとへ行と思へばやすく来りつ
といへり。

『略解』の説く所は、文辞もまったく『万葉考』のままであるか

ら、それを抄記したにすぎないと評すべきである。

〔略解〕氣は息也。尔余婆受は不_レ呻吟也。山路につかれては
息つきうめく物なるを、妹が許へ行と思へば、安く来りつとい
ふ也。

雅澄の『古義』も、『考』の説を祖述している。

〔古義〕岡部氏云、氣は息、尔余婆受は不_レ呻吟なり。妹が許
へ行と思ふ心より、山路もおぼえずして来ぬといふなり。

○歌意は、常は息つき呻吟_トて、艱難_トして越來なるに、妹許へ
といへば心空_トにて、弥遠長き山路をも息つき呻吟_トすして越來
ぬるよとなり。

近世の対立した二つの解釈の流れは、ほぼそのまま現代に及んで
いる。多少の複雑な要素を加えているが、宣長説を承けたものか、
さもなければ真淵・雅澄を承けたものであって、この二つを出な
い。

三 訓話諸説（近代）

数の上から見ると、「よばず」を「及ばず」の略と見る説の方が
はるかに多い。言語的検討を加えて、多少とも前進した点の注意さ
れるものについて、抄記してみる。

松岡静雄氏の「民族学よ東歌と防人歌（昭和三年・大岡山書店）の説、

ケニヨバズは「日に及ばず」の約、カ（日）をケと転ずるのは、「月に
日に」を「月にケに」、「朝に日に」を「朝にケに」といふが如く例の

多いことである。

〔考〕靈異記中巻二十二条に「呻」の字にニヨブといふ訓の与へてあるのを根拠として「氣呻ばず」の意とするものがあるが、ニヨブの語義は「人の助を呼ぶ」ことであるから、「氣」又は「異」と直接連結することが出来ぬのみならず、妹がりでない場合には常に呻吟すると説明することも困難である。

「日」が「日」の転であるという考えは、近世の諸説よりすぐれている。ただし、三三五六の結句の解釈に適するか否かには、まだ吟味を尽くしてみる必要を感じる。〔考〕の「呻ニヨブ」（清濁に問題がある）の語義について「人の助を呼ぶ」ことであるとしているのは、松岡氏の考えがあつたのであろうが、従いがたい説であるし、歌意に関して「妹がりでない場合には常に呻吟すると説明することも困難である」という論理もはつきりしない。「氣呻ばず」を否定する根拠として十分であるとは思えない。

鴻巣盛広氏の『万葉集全釈』（昭和八年・大倉広文堂）、契沖説を批判して、

ケを異とするは仮名遣奥の山路に従ふとすれば、氣と異とは別類の音であるから、これは同一視しない方がよい。食と日とは氣と同類であるが、食に及ばずと見るのは頗る穩やかでない。すると、日に及ばずして来た。即ち一日かからずして到着した意と見るのが、最も穩当であらう。

と説いている。「氣」はケの乙類、「異」は甲類の「家」を用いた例もあるから、まことに右の批判の如くである。「食」と「氣」

は仮名として通用した例があるから同じ乙類である。「日」を乙類と定める根拠は「朝尔日尔色付山乃」（六六八）を「朝尔食尔恒見杼毛」（三七七）と比較して「アサニケニ」と訓するのが妥当と考えられること、「長氣乎如此耳待者」（四八四）などの「氣」が「日数」と置き換えられる意を表わすとすれば、日数を数える「カ」と通ずる「ケ」であると考えてよいことなどであろう。それはよろしいとして、「けに及ばず」という表現があつたと仮定して、はたして「一日かからず」の意味を表わすにふさわしいかどうか、そのへんに問題が残るのではないか。

武田祐吉博士の『増訂万葉集全註釈』（昭和三年・角川書店）には、

諸説があるが、本居宣長の日ニ及バズ来ヌとする解がよい。ケ一は時日。日を重なるに及ばないで来た。と、簡単に処理されている。

『日本古典文学大系万葉集』の頭注も、

日に及ばず―日数がたたない。原文、氣尔余婆受。呻吟（ケニヨ）バズ（息もぎらざる意）とする説もある。

として、上述諸説と大同の解釈を取っている。

他方、「け呻ばず」を採る説では、井上通泰博士の「万葉集新考」（昭和三年・国民図書）が注意すべきものである。

ニヨブは眞淵のいへる如く呻く事なり。靈異記中巻第廿二に呻言とあり。今も静岡縣などにては呻くことをニオーといふ。ケは添辭かとも思へどケオサル、ケヂカシなどのケは多少の意味を含みて純粹の添辭にあらねば例とはしがたし。或は異ニ呻フ

の「つ」を略してケニヨフといひ習ひしにあらざるか。又案ずるにニヨフはこゝに氣爾餘婆受と書きたれど今ニオーといふを思へばニヨフと清みて唱ふべきにあらざるか。もし然らば婆と書けるは波の誤字ともすべく（波と書ける本もあり）日本紀の如く清音として借れりとも認むべし。日本紀にはナニオ婆ムト、婆リガエダ、ミガホシモノ婆など清むべき處にも婆を借りたり。否本集中にも婆を清音に借れる例ある如し

土屋文明氏の『万葉集私注』（昭和二年・筑摩書房）に、

ケニヨバズキヌ ニヨフは呻吟する、うめくことである。ケは接頭辞であらう。動詞につく接頭辞ケは集中には見えないが、このケを日の意のケとし、ヨバズをオヨバズの意とするのも肯ひかねる。

とあるのは、一つの見識たるを失わない。語義語感に忠実な解釈だと思ふ。

くわしい検討を加えて論ぜられた注解としては澤瀉瀉久孝博士の『万葉集注釈』（昭和四年・中央公論社）がある。契沖・真淵・宣長の説に対する批判も聞くべきだが、上来の記述と重複する点も出て来るので、要点だけ飛び飛びに抜いてみる。

①けによはす来ぬー「波」類、紀による。古は片カナ。西その他「婆」とある。

②日本靈異記（中二二）の訓注に「呻尔与」とあつて考の説がさすがだと思ふが、「氣」を息と見る点に疑問がある。

③「氣」を「日」と見て「日に及ばず」として、「幾日もかか

らないで来た」（全註釈）としたが、幾日もといふのはこの場合どうであらう。又「一日かららずして」（全釈）といふのも「け」の用例から疑はしく、「日数もおかずまたやって来た」とあるのは穩かなやうだが、

④新考に、今も静岡県で呻くことをニオーといふところを見るのとニヨフと清みて唱ふべきでないかとあり、日葡辞書「ニヨウ」又竹取物語の「によふく」を「によろく」とした写本があるのは語尾が清音であつたためと思はれると橋本君も云はれる。古本に「波」とある点を考えて、「及ばず」より「呻はず」の解の方が適切だと思はれる。

⑤たゞ「氣」の解であるが、「氣」を「息」の意に用いた例はいくつもあるが、いづれもイキと訓ませてゐて、ケと音読したものはない。或いは「於伎都渚」（三三四八）「加奈思吉兒呂我」などと同じく正訓したものではなからうか。ニヨと（イ）とあるので字余例にかなふと思ふが、一字を二音に訓む例はこの巻では地名に限られてゐるといふ難がある。

①は私の得た結論も全くこれに一致する。②の中で、「呻尔与」は字が落ちたのか、「尔与夫」または「尔与フ」とあるべきである。「靈異記」の訓注の万葉仮名表記は清濁を区別していないのが原則だから、「尔余夫」とあつても「ニヨフ」と読む証とはならない。従つて④の「呻」の「ニヨフ」の語尾清音説を妨げるものではないことになる。③の「けに及ばず」説批判は聞くべきである。ただ、「日数もおかずまたやって来た」という解を穩やかなやうだとされた

が、私にはその解もやはり不自然な感じがする。⑤は「氣いに呻よはず来ぬ」と訓む試案をなけば否定的に提示されたわけだが、「息いに」
「呻よふ」で句が成立しそうにも思えない。(呻よふは苦痛のあまり
声こゑを發する意である)

近世の諸説に比して近代の諸説では、上代特殊仮名遣におけるケの甲類乙類の別や、万葉仮名の清濁についての吟味が加えられている事は注意しなければならぬ。契沖の説の中の「ケ」が「異」であろうとする考えが決定的に否定された事などは、「けに及ばず」系の当否は別にしても、注釈史上特筆にあたります。

近世近代を通じて「氣い呻よはず」系の諸説においても、「呻」の意の動詞を「によぶ」と語尾を濁音にしているのが、むしろ普通であった。辞書の項目としての「によぶ」の語尾を決めたものは、恐らく万葉歌三三五六が「氣い呻よはず来ぬ」と訓まれた事であろう。ところで、「日に及ばず来ぬ」を採る場合、『万葉集』には「によぶ」の用例はなくなる。従ってその説に従いながら、「によぶ」という濁音形が一般に信ぜられるというのは、奇妙でもあり、面白くもあらぬ。しかし、「氣い呻よはず」を採る場合は『万葉集注釈』の説のように、本文を「氣い余あ波な受う」に定める事から始めるべく、「けによばず」という形のままで「氣い呻よはず」を一説として立てるのは妥当ではない。

さて、「日に及ばず」か「氣い呻よはず」か、語として成立するか、意味の上で、三三五六歌の中で自然で適切であるか、十分に検討されて来た問題だとは思いますが、まだ多少残された所があるので、はなからうか。

四 「日に及ばず来ぬ」を疑ふ

『代匠記』に発した「けに及ばず来ぬ」の中で、「け」を「異」とする考えは、「異」が甲類の仮名を表記され、「氣」は乙類である事で決定的に否定され、「食」とする考えや、「け」を「来経」の約とする宣長説は、「け」の語義・語史の上からの検討に堪えるだけの根拠がなく、結局「日」を当てる近代の諸説に移行した。「日」は日数を量る形態素としての「日」の転であるとする考えは、近代の諸説に通ずる所で、その限りではけだし妥当であろう。

ただし、三三五六歌結句の「氣」が「日」であるか否かは、「及ばず」という語形が妥当であるか否かで決定される問題である。

「おもふ(思)」が「もふ」となるから、同じように「およぶ」が「よぶ」になると考える推論は、かなり危険である。万葉語の中で語の頭に位置する母音が脱落する例はなるほど少なくないが、脱落するそれなりの条件があると思う。

他の語の下に付いて複合語を造る場合に見られる「足の音」「尾上」「子馬」の類は、一語の中で母音連続をきらう音韻結合規則と関係があるろう。「出づ」が「出」となり、「寝ぬ」が「寝」となる類は、「出」「寝」の方が語の根幹として存し、「い」が二次的な付着であったかと思われる。「おもふ」の場合も語の中心が「もふ」の方にかつていたとも思われる。つまりは、「もふ」の方が根幹をなすものであろう。恣意的に語頭の母音を略するような事が

あったとは思えない。

このような語の約略を説くのは、近世の注釈学者のおちいり易い共通した欠陥であつて、契沖もその例外ではなかつた。「及ぶ」が「よぶ」に転ずるといふような事は、実証する事が出来ないし、信じ難い不自然さがある。

万葉語彙の中には「及ぶ」は存在しなかつた。平安朝の「及ぶ」の用例の中にも、一日に及ぶとか幾月に及ぶとかいふような意味用法はまだ見られず「よぶ」のような省略形はもちろん存在しない。

「及ぶ」といふ語形が存在したと仮定しても、「日に及ぶ」といふ表現が可能であつたらうとは、とても信じられない。その根拠として、「日」の語が「一日」「一月」「一年」とかいうような一定の長さを示さない、現代語の不定的な「日数」の意に近い用法の語であるという点をあげる事が出来る。「日数を重ねる」とは言えても「日数に及ぶ」とは言えない。だからと言つて、「日」に「多く」の「日数」の意を与える事には従い難い気がする。「日」といふ語には長短多少という限定が含まれないからこそ「日並べて」「日長く」などの表現が成立するのである。

歌意の面から考へて、この歌は女の許に通う男の心を歌つたものであろう。片道に幾日もかかるような遠距離からではあるまいから一日もかからずと言つてみても愛情の強調効果はないし、幾日もかからずでは情況に会ふまい。

五 「け呻はず」の意味の吟味

「けによぶ」を採る説でも、「け」を息の意とした真淵は「気が「け呻ふ」と考えたものであろうが、「息が」と「呻吟する」ではつながらないであらう。「氣」を「呻ふ」の主語に持つて来るのはまずい。

「によぶ」の意味は、苦痛のあまりうめき声を発するという事であらう。松岡静雄氏が、

ニヨブの語義は「人の助を呼ぶ」ことである云々

と説かれたのはどこかに取り違えがあらう。『時代別国語大辞典上代編』では、「によぶ」と濁音を探り、語義を「うめく、呻吟する」とし、用例としては、「一応は「け呻婆す来ぬ」を採用、その他に

「随し却、如先復响呻カビニヨブ八ヤル夫ノ也」(靈異記中三二)

「数日不レ死、昼夜泣吟」(垂仁紀二八年)

「呻吟」(黒板本金剛般若集験記古点)

を掲げ、考説を次のように加えている。

〔考〕第一例はケニヨブという分析が成立するかどうか、確實でない。第二の例は必ずしも濁音語尾を示すとはいえず、また竹取物語の「によぶによぶ」を「にようによう」とする写本があること、日葡辞書にもニヨイ・ニヨウ・ニヨウタとして見え、むしろニヨフと清音であつた可能性の方がつよい。なお万葉八九二の「乞々泣良牟」を「吟泣良牟」の誤りとしてニヨビナクラムと訓む説もある。

右の用例中、訓読語「呻」「吟」とあるのは、もちろん濁点は除

いてもよいものであるし、「靈異記」の訓注は「ニヨフ」と清音に読むことを妨げない。『万葉』三三五六歌も「氣尔余波受」を本文に立てれば、「ニヨフ」の語尾が濁音であるという証跡はすべて消える。近代の辞書・注釈書にのみ「ニヨフ」が存在するが、それは「け呻ばず」と誤り訓じた結果で、幻の語形であったと考える根拠は十分にある。

右の「ケルニヨブ」という分析が成立するかどうかという疑問について考えてみる。考察はまず「け」の語彙的位置を定める事が前提となる。万葉仮名「氣」で表記しているからケ乙類で、「異」とは別語。「日」とは同類だが、「日」ならば「呻ふ」と結合する可能性は全くない。

もし「呻ふ」と結合する形態素であるとすれば、接頭語化する「け」しかあるまい。接頭語化した「け」は、次代の中古になると、活潑な造語能力を見せている。形容詞に結合しては、

けうとし・けおそろし・けかしこし・けきたなし・けぎよし・けすさまじ・けだかし・けちかし・けどほし・けなつかし・けにくし・けむつかし

動詞に結合しては、

けおとる・けおさる・けはなる

などを挙げる事が出来る。「けざやか・けざやく」について接頭語「け」を想定するのが通説化しているが、私は否定的見解を抱く。別稿において論ずることがあろう。

接尾語化した「け」も同系同源の話であろう。

「けによふ」の語構成も右に近いものと私は見ている。苦痛を訴えてうめくような様子を見せる意であると解する。

万葉語としては、「けによふ」を認めないとすれば接頭語化した同系の「け」は一例もなくなる。しかし中古にこれほど造語能力を示しているという事は、上代にその源をなす同系の「け」が姿を見せないはずはない。

『時代別国語大辞典』の記載を見よう。

け〔氣〕(名)あるものから発する精氣。ものの気配。

〔竈には火氣吹き立てず〕(万八九二)

〔塩氣立つ荒磯〕(万一七九七)

〔刀衾らが焚く火の氣〕(神樂湯立歌)

〔ケキタナシ〕(名義抄)

〔考〕「氣」の音(名義抄に「氣イキ・ケハヒ・ツケ」とある)に由来するといわれる。平安時代にはその複合語の種類も多く、独立して「けも無し」なども用いられるが、上代では接辞風の例ばかりで、数も少ない。

右の解説に、私によくわからない点がある。上代には接辞風の例がきわめて少ないと見るべきではないか。「火氣」^{ホケ}「塩氣」^{シホケ}の「け」も接辞ではない。「ケギタナシ」のような訓読語を上代の語彙と認めれば、「け」を接頭語化して用いた例が、その源を上代に発したと見る事を可能にする。

「けによふ」の「け」が右と同系であると見て、「けが呻吟する」という構造が不可能である点から、必ずや接頭語風に冠せられ

たものであろう。

同じく動詞を構成した例について考えると、「けおさる」は「圧倒される様子を見せる」のであり、「おされば」でもあり得よう。さらば「けによふ」は「によひげ」であることであり、「苦痛のあまり音をあげる様子を見せることであらう。

六 「け」を字音語とする説を疑う

普通に「気」を当てている「け」を、字音語と見る事が、厳密に考えてみると、不審な点が少なからずある。後世ではこの種の「け」には「気」を当てる事が日常化しているのは事実であるが。

なるほど「火気」(八九二)「塩気」(一七九七)でも漢字「気」を用いている。漢字「気」の意味も用字意識の底にはたらいいていたと見る事は自然である。「気」の字義が日本語の中の「け」と相似点がきわめて大きい事も否定出来ない。漢和辞書の類でも「けはひ」という和語に「気配」の文字を当てて採録しているものが多い。

だが、「ほけ」「しほけ」のような語構成が万葉語の中にすでに見られる事に関して、字音語が和語と結合して複合語を造るという点に不審を抱く。後世にこそ「若衆」「遊び人」「移り気」などいくらも見られるが、万葉時代に他に例があるだろうか。また、字音語「気」が接頭語化したり接尾語化したりするという事も、きわめて奇異に感ずる。字音語が字音語であるという意識がなくなるまで固有語の中になじんでしまつて、固有の形態素とともに複合語を造

るまでには、かなり長期の歴史の経過を要する。

このように考えて来ると、「け」はやはり固有の和語であったのではないかという疑念が、早くから私の中にあつた。

「けしき」は明らかに漢語「気色」の呉音であるが、「けはひ」は和語の「け」に接尾語「はひ」の付着融合したものである。「けうとし」「けにくし」の「け」も、字音と見るのは無理である。私は現在ではそのように臆断する。

助詞・助動詞が外来語を含まない事を否定する人はあるまい。この原則は、接頭語・接尾語の類にも及ぼす事が出来るように思う。

それでは、そのような和語系の「け」の正体はどう説明されるか。同音の「日」は日を数える「日」の転として説明されているが「けによふ」の「け」や、「ほけ」「しほけ」の「け」も、「かあをなる」(一三八)「かぐろし」(三七九一)「かやすき」(四〇一)の接頭語「か」と同系語と見るべきではないか。この接尾語「か」は、具象的・感覚的に形状をさす所はないが何となく感じられるもの、「感じ」のようなものを表わす形式名詞であつたのである。形状言を造る接尾語は、中古ほど活潑ではないが、「おぼるか」(一四五〇)「おろか」(四〇四九)「いささか」(四二〇一)などを万葉語の中に拾う事が出来る。上代の「おぼるか」の同系語と見られそうな中古の「おぼろけ」、「いささか」に対応しそうな「いささけ」、「おろか」とすくなくとも形態的にはつなげる「うるけ」、「さはやか」と「さはやけ」「さはやけし」など辿つてみると、形態素としての「か」「け」両者を同系として見る可能性は

大きい。

接頭語ならびに接尾語の「け」を字音語系にあらざと見る事が出来れば、この種の接辞一般も助詞・助動詞類とともに、外来語を受け入れなかった通則を認める事を可能とするであろう。

「けざやか」「けざやく」の語構成の中に接頭辞「け」を想定する事が通説化して、その「け」を「界」の異音と見る説もあるが、この二つの語は、「けざ」「きわやかなさま」を語根とし、それに接尾語「やか」「やく」がついたものと見るべきであると思われる。これについては近く小論を予定している。

七 「によふ」(呻・吟)の類語

「によふ」が「呻」「吟」の字義に近い意味をもつとすれば、同じ万葉語の「さまよふ」「のどよふ」と相似た構造を有し、語義にも相似た点が多い事に気づく。

ぬばたまの夕になれば 大殿をふりさけ見つつ 鶉なすい葡萄もとほり さもらへどさもらひ得ねば 春鳥の佐麻欲比ぬれば
 ……(巻二・一九九)

人麻呂の歌、高市皇子の薨去を悲しむ挽歌、「さまよふ」は嗚咽の意かろう。悲嘆のあまり声を立てて泣く意味を表わしている。春の小鳥が鳴くように声を立てて泣くのだから、細い声でむせび泣くさまを思わせる。

若草の妻も子ども 彼此に多に囲み居 春鳥の声の佐麻欲比

白妙の袖泣き濡らし 携はり別れかてにと 引き留め慕ひし
 ものを…(巻二十・四四〇八)

防人とその家族とが別離を悲しんで泣くさまであるが、春鳥の鳴く声を連想させるのは、「さまよふ」が咽ぶように泣くことを表わすと思わせる。

父母はまくらのかたに 妻子どもはあとのかたに 囲み居て憂へ吟ひ 飯炊く事も忘れて ぬえ鳥の能桴与比居るに…(八九二)

憶良の「貧窮問答歌」、「さまよひ」と「のどよひ」とが極めて近い意味を有する事が、文脈からも察せられる。「のどよふ」について、「金剛般若経集験記」の訓点に「細々声」に「ノドヨフコエ」とあるのを証として、細々とした声を出すことであるという橋本進吉博士の説がある。動詞「のどよふ」は「さまよふ」と同じく声を出して泣くことであろう。ただし、訓読における「細々声」に対する「ノドヨフコエ」は、釈義ではなくてむしろ翻訳であろう。「万葉」の表現から帰納すると、声を抑えて咽ぶように泣く意を表わすのが「さまよふ」であろうと思われる。

「さまよふ」「のどよふ」「によふ」三者が語末の「よふ」を共通に有する点は軽く見のがしてはならない。「よふ」は接尾語というようなものでなく、ここにこそ意義の核が存在すると見たい。声を出して泣く、またはうめくという意義素をこの部分にもつのである。これらの上に冠せられた部分には三者の意味上の微妙な差別が含まれていよう。「よふ」の「よ」は泣き声うめき声を写す擬声

を含んでいたろうし、「によふ」の「に」は「音」と同系の感声起源の形態素でもあろうか。「のど」「さま」にも何か意義を荷なう所があったように思う。

「によふ」は、『万葉』で「吟」を当てているし、訓読語では「呻」を訓んだものが多い。どちらも苦痛のあまりにうめき声を立てる意を有する。『万葉』では「吟」を「さまよひ」と訓ませたと判断される例がある。その「吟」は吟詠する意もある事から考えると、「さまよふ」にも、感に堪えず嘆声を発する、悲嘆のあまりに声を長めて咽び泣く、など、多少の幅があったかとも思われる。「のどよふ」は訓読語例から推して、忍び泣きする意の方に近いと考えたい。

八 「によふ」語誌拾穂

すでに触れた事項は省く。「によふ」は中世にはかなり多くの文字化された例を見る。すべての記載例に語尾を濁った痕跡を見ない。

『徒然草』一八五段「世には心得ぬ事の多きなり」の章、酒を強いる事の不当を論じ、

あくる日まで頭痛く、物食はず、によひ臥し、生を隔てたるやうにして、

とある。近代の活字翻刻では「によび」と濁点を施しているが、手許にある寛文七年刊の板本では濁点はない。近世の板本の清濁は一応の資料的価値がある。

同じく八七段「下部に酒飲まする事は」の章、『徒然草総索引』

の本文は十行古活字本を底本としてあるのだが、具覚坊はくちなし原によひふしたると濁点がない。

この八七段について、前記寛文板本には、くちなしはらにゑひふしたる

とあるが、単なる誤写なのか。次にあげる『平家物語』万治二年写本の振仮名と考え合わせると、

くちなしはらに「に」えひふしたる

の一字脱かとも考えられる。『徒然草』にそのような異文があったかも知れない。

『平家物語』の例は卷八「緒環」の段であるが、眼に触れる活字翻刻は多くは語尾に濁点を施しているが信頼性がない。私もまだ調査不足だが、たまたま手許に蔵する万治二年十二月七日の書写識語を有する写本、私の見る所では音訓や清濁を知る上にかかりの信頼性があるが、

女岩屋ノ口ニ立チテ聞ケレバ^{フツコシ}柝ケナル声ノ^ニ喚ヒケリ。とある。

『宇治拾遺物語』にも数例あるが、万治刊本で濁点を施したものは一つもなく、さもなくば「によよう」と転呼した形かである。

『日葡辞書』等では、

Niyoi, o, oia. (日葡辞書)

Niyoi, yō, yōta. (日仏辞書)

(一九七六・四・二八記し畢る)